

!!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて紹介していくコーナーです。今回はこの方にお話をうかがいました。



第18会計監理中隊 財務管理部

つはこ きよみ

予算分析職

津波古 京美さん・モーツ 華月さん



〃

かげつ

Q1. あなたの職種と仕事内容をお聞かせ下さい。

(モーツ) 財務管理部は3つの班にわかれ、第18航空団や*パートナー部隊の予算を担当しています。各班は空軍兵と日本人従業員合わせて4人で構成され、予算分析職の担当者が班長の役割をします。3つの班のうち、2つの班長は軍人ですが、私は第18施設群及びパートナー部隊を担当している班の班長を務めています。担当している部隊と密に連絡を取り合い、毎日絶え間なく動いているお金の流れが年間の支出計画書に基づいた出費なのかを確認します。また、突発的な出費のある場合は、その部隊の任務に即したものか、必要不可欠なのか、部隊に許可されている物品なのかを精査し、空軍規則に照らし合わせ支出可能か否かの判断をします。また、部隊からの相談にも応じていて、出張費として認められるのかどうかなどの問い合わせもあり、空軍の規則と照らし合わせ確認し、助言します。各部隊に振り分けられた予算は支出計画書に基づいて執行されますが、財務管理部からの承諾がない限り実際の支出はできません。航空機整備品購入費、出張費、あるいはペン1本の購入に対しても、この部署の承認なしには予算は使えません。*パートナー部隊：嘉手納基地に駐留する第18航空団以外の部隊で、空輸機動中隊、偵察中隊、特殊作戦部隊などがある。

(津波古) 私は、同じ分析職ですがどの班にも属さず、「資金統制」を担当しています。この仕事は、3つの班の仕事を総合的にとらえ、各班が担当している部隊の枠を超えた全体的な予算分析をしています。それぞれの班も各部隊の予算をモニターしていますが、年間の予算を見ながら、四半期ごとに分配されている予算がその予算内に、そして各四半期の期間内に消化しているかを確認します。空軍の規則により四半期ごとに予算全体から決められた割合を支出していくますが、年度末が近づくにつれ割合は増え、最終的に9月の年度末には予算全額を支出することになります。また、太平洋空軍から追加予算が承認された場合、各班にその予算を振り分けたり、部隊間で予算の移動が必要な場合の手続を取ります。毎年どうしても、予算不足の状態になってしまいがちなのですが、第2四半期と第3四半期に追加予算請求の機会が与えられます。各部隊から予算追加請求が提出された場合、予算不足の理由を調査し、その理由が正当なものなのかを分析し追加予算を請求する際に提出する理由書やデータを揃え、承認を得るため対応します。



(モーツ) 仕事は毎朝、部隊の資金状況を把握するため報告書を点検することから始まります。嘉手納基地全体、担当している部隊とその傘下にある部署ごとの報告書を読み、利用可能額が正しいか、決められた予算内で支出をしているかなどを確認します。前日の報告書と比較し、支出金額、支出科目を調べます。例えば、前日の報告では5千ドルの支出だったのが、実際は6千ドルになっていたとすると、この差額の派生事由を調べます。

(津波古) なぜ支出の理由を確認するかというと、支払額が予算の枠内なのか、あるいは急に発生したものなのかを把握する必要があるからです。支出計画書に即し支出をしなければなりませんが、予定外の支払いも発生するわけで、弾力的な予算調整が求められます。その際、各部隊の予算担当者に助言をしながら進めていきます。

(モーツ) 財務管理システムはごく一部を除いて全てオンラインで処理手続ができます。ただ、事務所内でコンピューター上の数字だけを追いかけているわけではなく、2ヶ月ごとに担当している部隊の部署を順々に訪問し、その部隊がどのように予算を使っているのか、請求されている予算要求の信憑性を実際に目で見て確かめるようにしています。

SpotLIGHT!

(次ページへ続く)

(前ページより続き)

(津波古) 部隊の任務がどのようなものなのか、その任務がどのように遂行されているかを確認することにより、その部隊に対する理解が深まり、実際どこに何が必要なのかを把握することができます。部隊訪問は空軍規則で決められたことではなく、財務管理部の自発的なプログラムで、分析をするための様々な情報収集という点で、役立っています。

(モーツ) 昨今の緊縮財政という状況も含め、申請された予算額をそのまま許可するのではなく、部隊を訪問して財務管理部の見解を各部署の予算担当者に伝え、部隊の会計担当者が気づかなかつた点を指摘することにより経費節約に繋がることもあります。より賢明な予算の使い方をするための提案や助言を行います。

Q2. 職場のスタッフ構成は?

空軍兵7人、米国民間人1人、そして日本人従業員9人です。



Q3. この職場に勤めてどのくらいですか? (津波古) 10年です (モーツ) 14年です

Q4. どういう点に仕事のやりがいがありますか?

(津波古) 書類手続のみではありますが、自分の机の上を通っていった予算書によって、計画されたことが成し遂げられたことを知ると少しでも役に立ったのだなと感じます。また、財務管理部では、基地司令官が任務に関する意思決定をする際、その支援をする役割を果たすことを目指としています。その意味でも、役に立っていると感じることにやりがいがあります。

(モーツ) 私も同様に私が担当した予算書によって建設された建物を目にしたり、航空機の整備ができたことなどを知ると、仕事をしている意義があるなど感じます。任務を遂行するためには運営費が必要不可欠です。その必要不可欠な経費の支出承認をしているのがこの職場ですので、嘉手納基地の任務遂行に役に立っているのだということにやりがいを感じます。

Q5. この仕事の大変さについて。

(津波古) 予算執行が滞りなく行われるように、常日頃から課された仕事に問題が起きないように常に詳細に気を配ることを心がけています。また、問題が起きたときもそれ以上の問題にならないよう最小限に抑え予算執行をしていくことです。また、財務管理用システムの更新や変更が多いので、それに対応しながら業務を滞りなく進めています。

(モーツ) 米国も毎年予算状況が厳しくなっていく中で、前年同様に今年も同じ額で同じ任務を遂行できるかといえば、それは出来ないと答えるしかありません。同じように任務を遂行しているように見えても、予算的にはどこかやはり異なったことが出てくるのは仕方のないことだと思います。そこで、その年毎の状況や要求事項に即した臨機応変な対応をしていかなければならぬところだと思います。



Q6. アメリカ人と働く環境での一番の課題は何ですか?

(津波古) この仕事をしていく上で各部隊の予算担当者と密な意思疎通をし、お互い連携をとりながら仕事を進めていくことがとても大切なことなのですが、空軍兵の嘉手納基地での勤務は約2年から3年なので、担当者が管理している様々な予算プログラムの内容や流れを理解できるようになり、やっと共通の理解のもとお互い意思疎通が出来るようになってきた頃になると転勤してしまいます。2~3年ごとにまた最初から関係を作り上げ、共通の理解を持てるようにしていくことです。

(モーツ) 日本人従業員は長年勤務していることで得た知識、経験、そして教訓のお陰で仕事にできるだけ細やかな対応をとろうとします。仕事の流れの中で、ここはこうした方が良い、そこはああしたほうが良いと経験の浅い空軍兵に助言をしますが、仕事上、瞬時にその助言の結果を見たり、経験できることが少ないので、細かく対応していくことの重要性をその場その場で説明し理解してもらうことが課題です。その一方で、空軍兵と日本人が一緒に働いていて、バランスがこれで取れて

いるなと思うときがあります。それは、明るい性格の彼らが、仕事の過程で心配しすぎて今一歩踏み出せないでいる日本人従業員に「どうにかなるよ！」と背中を押してくれたりすることです。



Q7. 軍の仕事で感じる相違点は?

(津波古) 自由な雰囲気があると思います。たとえば服装など個人的に着用したいもので構わないところです。また、職場でのチームワーク作りの活動が盛んなことや、季節ごとの行事、感謝祭やクリスマスなどに関するイベントが多いことです。そして、個人の権利に関してきちんとしてくれていると思います。転職等に関して言えば、日本人従業員は個人の希望での移動が可能です。日本の官公庁や民間企業では、決まった期間で人事異動を受けて職種を変えることが殆どだと思いますが、日本人従業員は希望すれば基地内で出る求人募集に応募し異動が出来ることです。

(モーツ) 米軍基地では「家族あっての仕事」というと基本理念があります。家族のサポートがあるからこそ仕事ができるという考え方です。家族を大切にすることは当然のことなので、家族に関わることや、子どもの学校行事等があるときには快く送り出してくれます。このような形で働きかせてもらえることに日々感謝しています。

Q8. 同じような職種に就こうと考えている方へのアドバイスは?

(津波古) 予算分析をする立場上、日本の経理や簿記のような技術的な資格を求められているわけではありません。1から10までのステップがあって、それに従ってという風でもありません。予算に関する様々な情報を得るためにアンテナを張り巡らせ、興味をもって点を線につなげることが出来る人がいいと思います。経済学を学んでいると視野の広い良い仕事ができると思います。

(モーツ) 米軍の予算分析ですので、まず軍の組織を理解すること、そして各部隊の任務を理解することからはじめ、経験を通して知識を深めていくしかないと思います。また、分析をすること自体が好きな人、様々な状況や事態に対応できる柔軟性が必要だと思います。常に社会情勢が経済活動に影響しているということに興味のある人は上手くやっていけると思います。

SpotLIGHT! SpotLIGHT! SpotLIGHT! SpotLIGHT!





現役高校生、デリースが教えてくれる
嘉手納基地内学校情報あれこれ

PART 3

嘉手納基地広報局インターン生
嘉手納ハイスクール2年 デリース・ダニエルズ著・編集



カデナハイスクールのスポーツ部活動

カデナハイスクールでは、学業だけではなく放課後の部活動にも力を入れています。運動部の部活動はシーズン制で秋、冬、春と季節毎に分かれており、各シーズンが始まる前に、生徒たちは希望するスポーツ部のトライアウト(適正テスト)に参加しなければなりません。

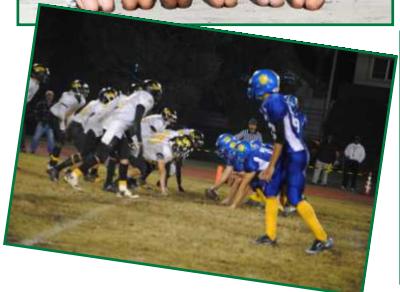
トライアウトでは生徒たちの一般的な運動能力と各種スポーツに求められる独特の技能が試されます。トライアウトの期間は通常一週間ほどで、テスト終了後、担当コーチの教室のドアに選抜された選手リストが掲示されます。生徒たちは、「バーシティ(Varsity)」(レギュラー選手)と「ジュニア・バーシティ(Junior Varsity)」(補欠選手)に分けられます。

レギュラー チームに入るには、より高度な技能が生徒たちに求められ、一般的に小さい頃からそのスポーツを練習している生徒が大半を占めます。補欠チームにいる選手たちは、この機会にそのスポーツを学ぶことに熱心な生徒や、来年こそはレギュラーチームに入りたいと願って頑張っている生徒たちです。高校4年生*は補欠チームメンバーという選択肢はなく、必ずレギュラー選手に選ばれなければなりません。毎シーズン、カデナハイスクールの運動部チームはクバサキハイスクールと対戦しており、また、極まれに球陽高校や沖縄県内の大学チームとも対戦したり、チームの力を高めるため励んでいます。

*カデナハイスクールは4年制です（日本の中学生3年生から高校生3年生）

カデナハイスクールで実施されているスポーツ部活種目別予定表

9月～11月	女子バレーボール、男女混合クロスカントリー、男女混合テニス、アメリカンフットボール、女子チアリーディング
12月～2月	男子バスケットボール、女子バスケットボール、男子レスリング、女子チアリーディング
2月～5月	女子ソフトボール、男子野球、女子・男子サッカー、男女混合陸上、男女混合ゴルフ



KADENA
HIGH SCHOOL

See you next!



米軍人・軍属等による事件・事故防止のための協力ワーキング・チーム

第18航空団広報局



外務省沖縄事務所主催による「米軍人・軍属等による事件 事故防止のための協力ワーキング・チーム(Cooperative Working Team)」が、3月28日に同事務所にて開かれ、米軍関係者による事件・事故防止策が話し合われました。

今回で20回目の開催となりました。CWTは、2000年に設置され同年に第1回会合が開かれました。日本政府機関（外務省沖縄事務所、沖縄防衛局、内閣府沖縄総合事務局）、在沖米軍（在日米軍沖縄事務所、海兵隊、空軍、陸軍、海軍）及び沖縄米国総領事館、沖縄県、沖縄県警、関係市町村（米軍基地が所在する市町村）並び関係団体（商工会議所・商工会・社交業組合など）により構成されています。

構成されています。空軍を代表して、第18任務支援群司令官が会合に出席し、空軍における綱紀粛正措置を説明しています。

弾薬庫内の不発弾処理作業に関する概況説明

第18航空団広報局

3月25日、嘉手納弾薬庫内で定期的に行われている不発弾処理作業に関して、地元関係者に対して説明会が行なわれました。嘉手納町、同町議会、読谷村役場、同村議会、外務省沖縄事務所、沖縄防衛局から約20名が参加しました。概況説明の中で、第18施設群の爆発物処理小隊隊長のケリー・マティー大尉は、処理作業の任務、処理される不発弾の種類、処理作業場などに関して、スライドを見せながら説明しました。その後、弾薬庫内に空軍バスで移動し、不発弾が実際に処理される処理作業場を見学しました。



(写真：空軍提供)

空軍特別捜査局、沖縄警察署長より感謝状を受領

(写真：空軍提供)



2月22日、沖縄警察署（沖縄市）にて、安村清正署長（中央）は、米国空軍特別捜査局沖縄624分遣隊（Office of Special Investigation Detachment 624）の特別捜査官キース・ハイデン氏（左）と特別捜査官補天願一馬氏（右）に感謝状を贈呈しました。2011年、OSIは県警に多岐にわたり協力し、今回の感謝状の贈呈となりました。

第18航空団広報局

Skoshi Kadena, published by 18th Wing Public Affairs, Kadena Air Base Kadena Web Site: <http://www.kadena.af.mil> E-mail: 18wg.pa@kadena.af.mil



Chief, 18th Wing Public Affairs Office: Major Christopher Anderson

Editors: Ms. Takako Fukuhara, Mr. Hideaki Sakihama, Ms. Keiko Toma, Ms. Sayaka Kawatake, Ms. Makiko Miyara and Ms. Derrice Daniels
Graphic Designer: Ms. Naoko Shimoji

The *Skoshi Kadena* is published monthly and is an authorized publication by 18th Wing Public Affairs in Kadena Air Base. Contents of the *Skoshi Kadena* are not necessarily the official views of or endorsed by the U.S. Government, the Department of Defense, or the Department of the Air Force. The editorial content is edited, prepared, and provided by the 18th Wing Public Affairs Office. All photographs are Air Force photographs unless otherwise indicated. Contents may not be reproduced, distributed, or translated without the prior written permission from the 18th Wing Public Affairs Office.

『スコシカデナ』は、嘉手納基地第18航空団広報局より毎月発行されている出版物です。編集内容は、第18航空団広報局により編集、準備、提供されています。掲載される内容は、米国政府、米国国防省または米空軍の見解・承認を必ずしも反映するものではありません。第18航空団広報局の書面による事前許可なしに、掲載写真や記事の無断転載を禁止します。